

足と人脈で集めたイラクの新聞

酒井啓子

『ニダー・ラーファイダイン』という新聞がある。現在イラクで与党連合の一角を占める「イラク・イスラーム最高評議会」（当時の略称は SCIRI）が発行していた機関紙だ。

この新聞に出会ったのは、筆者がアジ研の在カイロ海外調査員だった、九〇年代後半のことだ。当時、フセイン政権に反対する反政府政党はことごとく海外に亡命していたので、筆者は彼らを追いかけて亡命先のシリアやイギリス、ヨルダンに行き、インタビューしていた。

そんなときにダマスカスで訪れたのが、SCIRIのシリア支部である。当時の支部長は、バヤーン・ジャブル。今ではバークル・ソーラーグ・アルズベイディと本名に戻り、戦後のイラク政府で財相や内相を歴任する。将来の首相候補にもしばしば名が上がる。

バヤーン・ジャブルは、自らが編集長を務める『ニダー・ラーファイダイン』を掲げて言った。「これは情報の宝庫だ。反政府諸政党の動向はもちろん、フセイン政権の知られざる極秘情報もバツチリ！」

なるほど、情報量もさることながら、編集方針や記事内容を見ると、SCIRIの政治方針が如実にわかって面白い。SCIRIは亡命先のイランで結成され、基本的にホメイニー体制とイラン革命を支持する宗教指導者と知識人で形成されていたが、宗教界とは離れた、ただ革

命の熱気に浮かされた若者活動家も少なくなかった。ジャブル自身はエンジニア出身だったが、そうした「造反有理」が大好きなライターたちが書く記事を、楽しそうに紹介してくれた。訪問するたび、ジャブルの売り込みに負けて、筆者はその新聞を購読した。古いものがあると聞けば、バックナンバーも大人買いした。一九九五年からイラク戦争直前までの号だ。

それが今、アジア経済研究所の図書館に所蔵されている。イラク戦争後のイラク政治を担う政党の、若かりし野党時代の激しい主張が、紙面で踊っている。これを全部読んで SCIRI のイデオロギー分析をすれば、きっと面白い論文が書けるだろうなあ、と思いつつ、戦争、政権転覆と、あれよあれよと時代が変化した。

筆者自身も、研究所を去ることになったが、今でもアジ研図書館を訪れては、「時間をみつけて通い詰めるぞ」と、心に決めている。

アジア経済研究所図書館の最大の強みは、世界中からの新聞の収集である。今ではどんな小さな政党の機関紙でも、インターネットで拾える時代だ。だが、つい一〇年前までは、「途上国で発行されている新聞、雑誌の現物をどう手に入れるか」が、研究者の最大の課題だった。

『ニダー・ラーファイダイン』はシリア発行だったので、購読・郵送ができたが、当時経済制裁下にあったイラクの国内紙は、郵送どころ

か現地に行つて購入することもできない。結局イラクの知人を介して、買つては隣国に出たときにまとめて送ってもらっていた。当時の政府機関紙はむろんのこと、フセイン元大統領の悪名高き息子、ウダイが主宰する『バービル』紙も、散発的ではあるが九〇年代前半のものがいくつか、図書館に収められている。世界でも所蔵している図書館は、ほとんどないのではないか。

かつてイスラエルのイラク研究者が八〇年代半ばに、こう言ったことがある。「アラブ研究には新聞分析が欠かせない。イスラエルはアラブと国交がないけど、レバノンまで車を飛ばせば、その日のうちにいくらでも手に入るよ」。

これは、八二年にイスラエルがレバノンに軍事侵攻し、レバノン南部を手中に収めていたからこそ、言える発言だ。だったらこちらは、真つ当な手段で堂々と手に入れようじゃないか。

そうして、イラクの新聞は足と人脈で集められた。これだけの史料は、世界のどこにも所蔵されていない、貴重な史料である。

新聞だけではない。半世紀前からアジ研の図書館はイラク統計局から年次統計書を定期的に入手していた。五〇〜六〇年代の農業統計もあるが、現在イラクのシリア派の政治家たちの多くが、南部農村地帯の飢餓と辺境化をきっかけに政治意識を高めたことを考えれば、そこにイラク政治のルーツが隠されている。

広い机に史料を積み上げ、終日読みふける。そんな楽しみをアジ研図書館は与えてくれる。
（さかい けいこ／千葉大学教授）